

## 幼児の音とかかわる姿にみる気づきと保育への影響 — 3歳児クラスの新聞紙を用いた創造的な音遊びを通して—

南谷悠子 永津利衣<sup>1</sup>

### 要旨

本研究の目的は、新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムを経験することにより、日常生活や遊びの場面において、3歳児クラスの子どもに、音に関してどのような気づきが生起されたのか、また、どのように保育の展開につながり生かされたのかについて明らかにし、本プログラムの及ぼす影響について検証することである。

音遊びプログラム開始後に、担任保育士の記録と検討会から、子どもの特徴的な事例および省察を抽出し、考察した。その結果、3歳児クラスの子どもの気づきは、日常生活や遊びの場面において、「音への興味関心」「音の探究」「音遊びから楽器選択へ」と、次第に高次の気づきへと変容していた。また、音楽を特徴付けている要素である「強弱」や「音色」に対する気づきも認められた。音遊びプログラムにおいて、新聞紙に向き合いながら、音と多面的に、かつ、丁寧にかかわったことが、子どもの気づきを促していた可能性が考えられた。日々の保育の中で子どもが音に興味関心をもち、子どもの音とのかかわりが深まっていった姿から、担任保育士の環境構成が音を意識して行われるようになった。このことから、音遊びプログラムは、担任保育士に「音」という一つの視座を提供できたと推察した。本研究の新聞紙を用いた音遊びプログラムは、子どもの気づきを促した点と、保育への影響がみられた点において、一定の有用性があったと考えられた。

キーワード：音 3歳児クラス 創造的な音遊び 新聞紙 保育

### 1. 研究の背景と目的

「保育所保育指針」において、保育は環境を通して行うことを基本としている<sup>[1]</sup>。また、「保育所保育指針」3歳以上児の「オ 表現」「ウ 内容の取扱い」において、「①豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、さまざまに表現することなどを通して養われるようにすること」と示されている<sup>[1][2]</sup>。身近な環境の中で、音に着目したとき、子どもがさまざまなモノとかかわることで、音に気づき、遊びこみながら音を探索・発見し、音に関するさまざまな事象への気づきを得ていくのではないかと考える。したがって、子どもが自発的にかかわりたくなるような物的環境や、子ども自らが音に気づけるように促す保育者の存在といった人的環境が必要である。子どもは、身近な環境との相互作用によって、遊びを通して学びながら、豊かな感性を培っていくといえよう。

保育内容表現に目を向けると、環境と相互作用しながら、音とのかかわりの視点に立っ

---

<sup>1</sup> 拓殖大学北海道短期大学

た研究がみられるようになってきた。その中で、今川（2006）は、「表現の芽ばえの地図」を作成し、音とかかわりをもつ経験が、幼児期における表現の基盤形成であることを明らかにしている<sup>[3]</sup>。また、音とのかかわりから保育への影響を明らかにした研究もみられる。乙部（2018）は、4歳児クラスにおいて、音への気づきを促す保育者の援助のもと、音を介した表現は、環境とかかわりながら、音の創意工夫を通じて音楽表現へと展開されることを報告している<sup>[4]</sup>。そして、幼児期の主体的な音遊びの気づきについて、藤掛・北野（2014）は、振動、伝播、ものの性質と音の違い等、音に関する科学的な学びが含まれ、4歳児クラスの子どもがそれらを感覚的に学び取っていることを報告し、さらに、音色の違いや音の大小、音の高低といった音楽を特徴付けている要素<sup>1)</sup>につながる音への気づきが見られたことを述べている<sup>[5][6]</sup>。しかし、環境と相互作用しながら、音とのかかわりの視点に立ち、かつ保育への影響を明らかにした3歳児クラスの研究は少ない。

近年、3歳児の音への意識についての研究がみられるようになってきた。乙部（2020）は、日常生活において、子ども自ら音に気付く機会や音を聞く機会が少なく、特に自然の中の音を聞いていない傾向があることを報告している<sup>[7]</sup>。そして、吉永（2016）は、散歩中の3歳児が小川のせせらぎの音の違いに気づき、注意して聞き比べた様子から、「聴こうとしなければ聞こえない音の違い」について述べている<sup>[8]</sup>。吉永の研究からも、3歳児でも、「聴く」ということを丁寧に扱うことで、子ども自ら音とかかわることができる可能性があると考えられる。

保育者の問題もいわれている。吉永（2012）は、幼児教育において、幼児の音感受に保育者が気づいていないことを問題視している<sup>[9]</sup>。まず、子どもの気づきを保育者が受け止めることから保育は展開されていくと考えられる。子どもの気づきを促し、意味づけや価値づけを行う保育者の存在や、日々の保育において、子ども自ら音にかかわっていくことのできる環境が肝要であると考えられる。

南谷・永津（2020）は、3歳児クラスにおいて、身の回りの音素材として新聞紙を用いた創造的な音遊びを考案・実践した（2. に後述）。その結果、新聞紙という素材とのかかわり方を丁寧に提示し、子どもが自由に表す場をつくる中で、遊びとして現れる表現に、広がりや自由さがみられたこと、また、新聞紙によって子どもなりのイメージを主体的に表すことを楽しむ姿がみられたことを報告している<sup>[10]</sup>。

本研究の目的は、新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムを経験することにより、日常の生活や遊びの場面において、3歳児クラスの子どもに、音に関してどのような気づきが生起されたのか、また、どのように保育の展開につながり生かされたのかについて明らかにし、本プログラムの及ぼす影響について検証することである。

## 2. 新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラム

新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラム（南谷・永津，2020）の特徴として、以下の3点が挙げられる。①耳をすませて音を聴くこと、②遊びの中で自由に音を創ること、③身体の動きから音を引き出すこと、である。

以下に、新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムを示す（表1）。また、第5～7回の主活動において用いた「すきな音なあに」の歌は筆者らが創作したものである（譜例1）。

表1 新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラム

	活動	活動のねらい	内容
導入	① 絵本 身体表現	・活動への期待が高まるようにする	オノマトペの絵本からイメージをふくらませ、口々にオノマトペを言いながら、身体表現を行った。
	② 新聞紙回し	・音の無い空間をつくり出す ・身体の動きと音の関連を体験する	輪になり、新聞紙の音をたてないように隣の友達へ回すゲーム。サイズは 1/8 サイズから始め、1/4 サイズ（第3回から）、1/2 サイズ（第5回から）と大きくしていった。
主活動	第1回(9/30): 「どんな音がするかな」 「どこから音が聞こえるかな」	・音を集中して聴く ・音の出し方や音のする方向に注目する	「どんな音がするかな」音の出し方を隠して、丸める、たたく、破るなどして、新聞紙で音を出し、「どんな音がしたかな？」と子どもに尋ねた。子どもが答えた後、音の出し方を見せた。 「どこから音が聞こえるかな」子どもは体操座りで目を伏せ、筆者らが部屋の4か所で新聞紙を振る、丸める、破るなどして音を出し、その場所を当てた。
	第2回(10/21) 第3回(11/11) 第4回(11/18): 「どんな音がするかな」 「まねっこ遊び」 第4回のみ「新聞紙バルーン」	・対比した音に注意をむける（長い/短い、大きい/小さいなど） ・新聞紙の扱い方を知る（破る、丸めるなど） ・身体の動きと音の関連を体験する	「どんな音がするかな」第1回と同じであるが、第2回以降は音を対比させて提示した。 「まねっこ遊び」新聞紙の1/2サイズを1人1枚配布し、筆者らが対比のある表現を手本で示し、模倣した。 第2回:長く/短く破る、第3回:速く/ゆっくり丸める、第4回:1/8サイズに折って片手で持ち、手のひらで大きく/小さく3回たたく。 「新聞紙バルーン」4枚×4枚の新聞紙バルーンを大人が持ち、下にもぐって楽しんだ。
	第5回(12/2) 第6回(12/23) 第7回(1/20): 「すきな音なあに」	・即興的な表現を行い、子どもの自由な表現を促す ・友達の音を聴く	輪になり、筆者らが創作した「すきな音なあに」(譜例1)に合わせて、ひとりずつ新聞紙を用いた思い思いの音を創って発表した。子どもをランダムに当て、途切れないように行った。
	新聞紙を用いた自由遊び	新聞紙に十分に触れる	新聞紙を用いた自由遊びを5分間行った。
まとめ	片づけ	みんなで協力して片づける	片づけを行った。

譜例1 「すきな音なあに」 筆者をT、子どもをCで示した

①「耳をすませて音を聴くこと」は、「聴覚の意識化」をねらい、「新聞紙回し」として、活動の導入に設定した。また、プログラムを通して主活動の中に位置づけた。次に、②「遊びの中で自由に音を創ること」は、「自信をもってそのとき出したい音を創ること」をねらい、第5回～7回の主活動「すきな音なあに」に位置づけた。これは、即興的な表現で、子どもがひとりずつ、わらべうたのようなふしに合わせ、新聞紙を用いた思い思いの音を

創って発表する活動である。いきなり即興的な表現を行うことは難しいと考えられたため、第2～4回の「まねっこ遊び」において、新聞紙を用いて音の出し方を試すということを丁寧に行った。新聞紙で遊びながら、音を聴いたり、音を真似したり、試したりする内に、次第に表現意欲が培われると考え、「すきな音なあに」を設定した。そして、③「身体の動きから音を引き出すこと」については、導入の「新聞紙回し」、第2～4回の「まねっこ遊び」、第5～7回の「すきな音なあに」、かつ、まとめの「新聞紙を用いた自由遊び」に位置づけた。「新聞紙に対して、自分の身体の動かし方によって、音が出たり、音質が変化したりすること」また、「イメージした音を出すためには、どのように身体を動かしたらよいか工夫すること」をねらいとしている。

各回に共通する活動として、「新聞紙回し」（導入）と「新聞紙を用いた自由遊び」（まとめ）を設定した。「新聞紙回し」は、サウンドスケープ<sup>2)</sup>の概念を提唱したシェーファー（1992）の『サウンド・エデュケーション』〈課題 73〉から着想を得た<sup>[11]</sup>。また、「すきな音なあに」は、ペインター / アストン（1982）の『音楽の語るもの』の邦訳をきっかけとして広まった、創造的音楽学習<sup>3)</sup>から着想を得た<sup>[12][13]</sup>。本研究において「創造的な音遊び」とは、音を聴き、身体の動きを伴って試行しながら音を発見し、自由に音を創り出す遊びを指す。この根底に在るものは、サウンド・エデュケーション<sup>4)</sup>と創造的音楽学習の思想である<sup>[14]</sup>。

新聞紙を用いた理由を4点示す。①安全である、②身近な素材であり、ふんだんに使うことができる、③大きさを配慮すれば3歳児にも扱いやすい、④可塑性を備えた素材であり、身体動作を伴ってさまざまな音が生み出される可能性が考えられる、以上のことから、子どもの発達にふさわしいと判断し、新聞紙を音遊びに用いた。

実施にあたって配慮したことは、「子どもが安心して表現できるように、一部の活動を毎回繰り返すこと」「子どもの表現を誘導しないこと」「子どもの表現を認めること」の3点であった。各回の内容について、子どもにとって無理のない活動であるかどうか、また、実施時間について、子どもの集中力が続くかどうかを、事前に担任保育士および園長に相談し、各回約30分に決定した。

### 3. 方法

#### 3.1. 調査対象と調査時期

調査対象は、A県B市立C保育園の3歳児クラスの園児14名および担任保育士であり、担任保育士の保育歴は9年（C保育園3年目）であった。

担任保育士は歌に対する苦手意識があるため、音楽はあまり好きではなく、子どもと行う音楽活動はあまり得意ではないとのことであった。また、対象クラスにおいて、歌うこと以外の音楽活動は行われていない状況があり、楽器はまだ使用していないとのことであった。

調査時期は20XX年9月から20XX+1年1月までであった。

### 3.2. 倫理的配慮

保育園の園長に研究目的を説明した上で実施の許可を得た。園児の保護者および担任保育士に、研究目的や方法、結果の利用、プライバシーの保護について、研究のみに使用することを説明し、研究協力同意書の提出をもって同意を得た。

### 3.3. 調査方法

この音遊びプログラムの実施は筆者らが行い、担任保育士は子どもと一緒に活動へ参加した。また、担任保育士に、日々の保育の中で音に関してとらえた子どもの様子を記録しておくよう依頼した。そして、毎回、音遊びプログラム後に職員室にて約 20 分の検討会を実施した。この検討会では、音遊びプログラムのふり返りと担任保育士の記録の補足を行い、本研究の目的に照らして、①子どもの特徴的な事例、②担任保育士の省察、を意図的に尋ねた。参加者は、担任保育士、園長、筆者ら 2 名の計 4 名であり、筆者らは記録を取りながら、IC レコーダー（Panasonic RR-XP009）で録音した。

### 3.4. 分析方法

検討会の音声データを逐語化した。担任保育士の記録および検討会の逐語録から、日常生活や遊びの場面において、音に関してどのような気づきが生起され、その気づきの質に変容はみられるのか、また、どのように保育の展開につながり生かされたのかを分析の視点とした。担任保育士の記録および逐語録から、以下の 2 観点、①子どもの特徴的な事例、②省察、が述べられた部分を抽出し、考察した。

## 4. 結果と考察

担任保育士の記録と検討会の逐語録から、子どもの音に関する 49 の事例が収集された。これらは、子どもの「気づきの質」という点において、大きく 3 期に分けることができた。その中から、いくつかの事例および担任保育士の省察を時系列で示し、子どもの音とかわる姿にみる気づきと保育への影響について考察した。なお、考察に関連する箇所を下線を引いた。

### 4.1. 音への興味関心

担任保育士の記録とインタビューから、日常生活や遊びの場面において、子どもの音に興味関心をもつ姿が確認された（事例 1～3）。

#### 事例 1：帰りの会 10/1（第 2 回検討会より一部抜粋）

担任保育士：その後（第 1 回後）に、“音あてゲーム”です。それと、“どこで鳴っているかな”やりました。それが子どもから「やりたい」ってなって、「どこで鳴ってるかな」っていうのやって」って言われて。「えー」と思って、ひとりしかいないし、「どうしよう」って思って、まあ考えて、洗濯ばさみを使って 4 か所でやって。（略）帰りの会のときに、そういう声が挙がったから、「あ、よしよし」と思って。

#### 事例 2：自由遊び 10/29（担任保育士の記録より）

外から「ブーン」という音が聞こえ、「ブーンって音聞こえるね。何の音だろう？バイクの音に聞こえるね」と（子どもが）言う。

### 事例3：保育参観 11/8（担任保育士の記録より）

親子で新聞紙遊びをした際に、「破るとビリビリって音するんだよ。お母さんはどんな音に聞こえる？」と言っていた。

事例1は、新聞紙を用いた音遊び第1回目の翌日である。子どもからリクエストがあったことから、今まであまり経験したことのない遊びに子どもの興味関心が寄せられていたと推察された。そして、担任保育士は子どものやってみようという気持ちに答え、「どうしよう」と思ったものの、工夫して実践していた。事例2において、子どもは聞こえた音に対して、オノマトペで表し、「何の音だろう？」と問い、自身の生活経験と結びつけ、「バイクの音に聞こえるね」と言っていた。事例3においては、子どもが新聞紙を破る音をオノマトペで表し、母親へ「どんな音に聞こえる？」と言っていた。

### 担任保育士の省察1：11/11（第3回検討会より一部抜粋）

担任保育士（以下T）：何かちょっとしたときに音で例えるようになったなあっていうのをすごく感じて。略）今まで「あ、きれいだよね」って言うだけだったのが、「あ、ビビッて音がしたよね」何かそういう、何だろ、そういう音、どんな音だったかっていうことに、少しずつ置き換えてできるようになったかなっていうのはちょっと感じます。感性が育っているんじゃないかなあというのは思うんですけど。

園長（以下P）：いろんな音やつぶやきを、先生が今までだったらスルーしていたかもしれないんだけど、何となくそれが気づくようになったってこと？

T：たぶん、それが一番大きい。私の意識が変わった。

P：先生が、そうだね、やっぱり、やっぱりそうだね。小さなつぶやきにも、ちょっと「あっ、こんなこと言ってる」っていうことなんだよね。

省察1において、担任保育士は子どもについて、「ちょっとしたときに音で例えるようになった」と述べていた。これは、「子どもの耳がひらかれた」ということであり、音に注意を向けられるようになっていたといえよう。これらのきっかけとなったものは、新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムにおいて、「耳をすませて音を聴く」経験であると推察された。

担任保育士は、省察1において、「どんな音だったか」に子どもが気づいて表す姿を、子どもの新たな姿としてとらえ、園長からの問いかけに対して、「意識が変わった」とふり返っていた。事例3においても、担任保育士が、子どもの母親に対する発話を聞き取っていたように、「子どもの小さな気づき」＝「表現の芽」に担任保育士が気づき、拾いあげられるようになっていたといえる。

## 4.2. 音の探究

担任保育士は、子どもが音に興味関心をもつようになったことから、環境構成において空き箱を用意するなど音を意識するようになっていた（事例4、5）。その結果、モノとかわり、音を探索する子どもの様子が観察された。

### 事例4：自由遊び 11/13（担任保育士の記録より）

○担任保育士の環境構成...音の出るモノ（空き箱、缶など）を用意した。

・4～5人で空き箱をたたいたり、缶を振ったりして音を楽しんでいる。

A：ヨーグルトの容器に砂を入れてつくったマラカス。砂の量で音の違いはあまりなかったが、石の大きさが音が違うことに気づく。

B：缶をたたくのではなく、こすって音を出し、音の違いを見つける。

### 担任保育士の省察2：11/18（第4回検討会より一部抜粋）

担任保育士（以下 T）：音楽って、自分が苦手な分野、どっちかっていうと自分があまり取り入れてこなかったところだったので、私の中ではけっこう衝撃です。  
 園長：何か日々子どもたちと向き合うのが楽しいよね。今度これやってみようかな、とか、こんなもの出しとこうかな、とかさ。

### 事例5：自由遊び 11/25（担任保育士の記録より）

○担任保育士の環境構成...空き箱にストローをつけたギロのようなものや、空き箱にゴムをつけたギターのようなもの、大きなダンボールを用意した。  
 ・4～5人で手づくり楽器の音を楽しんでいる。  
 C：ダンボールをたたいているときに、大きな音は手のひらで、小さな音は指先でたたくなど、強弱をつけて遊ぶ。  
 D：ギターのゴムをゆっくり鳴らすのと、速く鳴らすのでは音が違うことに気づく。

事例4において、砂の量では音の違いはあまりなかったが、石の大きさでは音が変わること、また、缶をたたくだけでなく、こするという方法で音を出し、音の違いを発見していた。事例5は、手のひら・指先、ゆっくり・速く、といった身体の使い方と音の違いに対する気づきであり、「強弱」についての気づきでもある。モノとかがかわる中で、自分の力を加えることやその力加減で何らかの刺激が作用すること、つまり、「音として聞こえること」＝「音の即時フィードバック」が、遊びを推し進めたのではないだろうか。これらの事例は、音とかがかわる遊びを通して主体的に学ぶ子どもの姿といえる。手づくり楽器で遊びこみ、音を探索・発見し、さまざまな事象への気づきを得ていたことから、音を軸として遊びが展開していたといえよう。

省察2において、担任保育士の環境構成から、子ども自ら気づきが生まれ、その気づきが「音の探究」という広がりを見せていることに対して、担任保育士は「けっこう衝撃」を感じており、保育士自身も新たな気づきを得ていたと読み取ることができる。記録に子どもの名前が出てくるようになった点も特徴である。これまで子どもを全体でとらえていた視点が、一人ひとりの子どもの気づきや表現の姿をとらえられるようになったといえる。

### 4.3. 音遊びから楽器選択へ

子どもは、音への興味関心期、音の探究期を経て、歌の中において音色への気づきから、楽器選択へとつながる様子が観察された（事例6）。

### 担任保育士の省察3：12/2（第5回検討会より一部抜粋）

担任保育士：今までだったら、大きな音も「うるさい」って言っていた自分がいて、たぶんそれに怒られた子がシュンってなって、本当に負のスパイラル...。たぶん、その大きい音も受け入れられるようになったっていうか、「あ、そういう音もあるよね」って、たぶん私の考え方も変わって...。一緒に楽しめる感じ。

まず、省察3において、担任保育士は、大きな音も「一緒に楽しめる感じ」と述べていた。それは、担任保育士が子どもに共感できるようになり、新たな子ども理解へつながったと考えられる。

## 事例6：あわてんぼうのサンタクロース 12/2（第5回検討会より一部抜粋）

・「あわてんぼうのサンタクロース」の曲に合わせて、一人ひとり好きな手づくり楽器で自由に音を出して楽しんでいる。子ども全員が参加している。

担任保育士：「リンリンリン」のところで、「リンリンリンの音ってどれだろうね」という話をしていて。今ある楽器の中で、どれも、何か違うよねという話。「何かどれも『リンリンリン』じゃないよね」という話で、子どもたちも、何かしっくりこないな、「うーん」「うーん」ってなっていて、「何かちょっと違うよね」みたいな。（略）「じゃあどういふ音があるのかな」とって子どもたちをもっいて、「あ、先生いいのあるかもしれない、知っているかもしれない」とってところから、ちょっと鈴の方を持ってきて、缶を振ってみたりとか、そう、砂を全部ぬいてみたりして、「これは？」（鈴を鳴らす）って言ったら、「これかもしれない」みたいな。「あ、じゃあ、これ鈴っていうんだよ」とって話で。

事例6において、子どもは思い思いに手づくり楽器で音を楽しむ中で、歌詞の「リンリンリン」<sup>9)</sup>に合わせて出す音が、手づくり楽器ではしっくりこないことへの気づきが生まれていた。子どもは、「リンリンリン」の箇所について、自分の経験と結びつけ、「サンタクロースの音」や「クリスマスの音」をイメージしていたと考えられる。そのイメージと手づくり楽器の音色がどうもぴたりしない感じをもったということは、「音が音楽的な意味をもち始めた」ということではないだろうか。音に興味関心をもち、遊びながら音を探究する経験から、「音色」に対する気づきが生まれたと推察される。3歳児クラスの子どもは楽器をまだ使用していなかったが、担任保育士は、子どもの発言から楽器を出す必然性を感じ、鈴を提示した。そして、手づくり楽器の音を試したうえで、「これは？」の場面で鈴の音を鳴らしており、子どもは、「リンリンリン」のイメージと、鈴の音色とを関連づけ、「これかもしれない」という思いに至っていた。担任保育士の援助のもと、手づくり楽器の遊びから、歌の中でイメージにふさわしい楽器選択へ自然につながっていたといえる。

## 5. 総合考察

3歳児クラスの子どもの気づきは、日常の生活や遊びの場面において、「音への興味関心」「音の探究」「音遊びから楽器選択へ」と、次第に高次なものへと変容していた。創造的な音遊びプログラムにおいて、新聞紙に向き合いながら、音と多面的に、かつ、丁寧にかかわった経験が、子どもの気づきを促したのではないかと考えられる。

新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムは、日々の保育の中で子どもが音に興味関心をもったことから、まず子どもに影響を与えたと考えられた。そして、子どもの音とのかかわりが深まっていった姿から、担任保育士は環境構成を変え、一人ひとりの子どもの姿をとらえられるようになり、担任保育士自身の成長も推察された。音を意識した環境構成が行われるようになったことから、本プログラムは、担任保育士に、「音」という一つの視座を提供できたと考えられる。担任保育士の省察からは、子どもを受容し、保育が楽しいものへと変容しつつあることが読み取れた。視野を広げた担任保育士との日々の保育の中で、子どもは音を通じて環境とかわる感性が高まっていったと推察される。そして、子どもは主体的に音を探究する中で、気づきの質が変容し、「強弱」に対する気づきが認められた。さらには、子ども自ら音を感じ、イメージし、考えたことから、「音色」に対する気づきが生まれ、担任保育士の援助のもと、楽器選択へとつながっていた。子どもが音とかわる中で、気づきの質が変容し、日々の保育の中で自然な形で楽器の導入へとつながっ



たことは、大人が教えこんだものではなく意義深い。このように、新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムは、保育に一定の影響を与えたといえる。

「保育所保育指針」3歳以上児の「オ 表現」「(イ) 内容 ⑤いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」の解説(2018)では、「自分なりの素材の使い方を見付ける体験が創造的な活動の源泉である」と示されている<sup>[15]</sup>。3歳児クラスの子どもであっても、音素材との丁寧なかかわり方を知らせることができれば、音を介して子ども自ら環境にかかわり、自分なりの創意工夫により、音とのかかわりについて遊びを通して学んでいくことの示唆を得た。それを可能とし、発達を保証する保育者の役割は大きいといえよう。

本研究は、音とかかわることから子どもの必要感を伴った音楽表現へとつなげるための道筋として、ひとつの在りようを示したといえる。必要感とは、子どもが「リンリンリン」に合わせて出す音色に鈴を選択したように、子ども自らに思いがあり、その子なりの理由があることである。それは、豊かな音楽表現の根っことなるものであろう。

本研究の新聞紙を用いた創造的な音遊びプログラムは、子どもの気づきを促した点と、保育への影響がみられた点において、効果があったと考えられる。しかし、本研究で分析できたのは一ヶ園の事例にすぎない。今後は、音遊びプログラムの開発と評価を行うことと、音遊びから音楽表現へとつなげる在り方について検討し、研究を継続していきたい。

## 注

- 1) 音楽を特徴付けている要素とは、小学校音楽科学習指導要領において、身に付けることができるよう指導することとされている、共通事項の「音楽を形づくっている要素」のひとつである(文部科学省, 2017)。
- 2) サウンドスケープとは、カナダの作曲家である R.マリー・シェーファーが提唱した概念であり、「音の環境」を意味する。「音風景」とも訳される。
- 3) 創造的音楽学習とは、「子どもを音楽を生み出す存在として認識し、自ら音を探し、自由に創作する活動を音楽教育のなかに位置づけたもの」と定義される(坪能, 2004)。  
Creative Music Making の訳語である。
- 4) サウンド・エデュケーションとは、「聴く技術の回復と育成のために開発された教育活動の総称、サウンドスケープ思想に基づいた独自の教育プログラムの総称」とされる(鳥越, 2004)。
- 5) 「あわてんぼうのサンタクロース」(吉岡治作詞 / 小林亜星作曲)の1番の歌詞に、「いそいでリンリンリン、いそいでリンリンリン」や「リンリンリン、リンリンリン、リンリンリン」とある。

## 引用文献

- [1] 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領〈原本〉』(2017) チャイルド本社
- [2] 同上
- [3] 今川恭子(2006)「表現を育む保育環境—音を介した表現の芽ばえの地図—」『保育学研究』第44巻第2号 pp.60-70.

- [4] 乙部はるひ (2018)「幼児の遊びにおける音楽的表現の展開」『保育学研究』第56巻第2号 pp.75-86.
- [5] 藤掛絢子・北野幸子 (2014)「幼稚園での音遊び実践における科学的学び」『日本科学教育学会研究会研究報告』第29巻第3号 pp.55-60.
- [6] 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版社
- [7] 乙部はるひ (2020)「3歳児の音への意識に関する一考察—新幼稚園教育要領『表現』の視点から—」『帝京平成第大学紀要』第31巻 pp.181-187.
- [8] 吉永早苗 (2016)「まえがき」無藤隆(編)『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究—』萌文書林 p.iii.
- [9] 吉永早苗 (2012)「幼児期における音感受教育—モノの音・人の声に対する感受の状況と指導法の検討—」『白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程2012年度学位論文』p.14.
- [10] 南谷悠子・永津利衣 (2020)「3歳児の創造的な音あそび—音・モノ・自分—」『日本保育学会第73回大会論文集』K29-30.
- [11] R.マリー・シェーファー (1992)『サウンド・エデュケーション』鳥越けい子・小川博司・今田匡彦訳 春秋社 p.106.
- [12] J.ペインター・P.アストン (1982)『音楽の語るもの』山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり訳 音楽之友社
- [13] 坪能由紀子 (2004)「創造的音楽学習」『日本音楽教育事典』音楽之友社 p.535.
- [14] 鳥越けい子 (2004)「サウンド・エデュケーション」『日本音楽教育事典』音楽之友社 p.397.
- [15] 厚生労働省 (2018)『保育所保育指針解説』フレーベル館 p.273.

## 付記

本研究は、日本保育学会第73回大会、日本音楽教育学会第51回大会で行った研究発表をもとに、加筆・修正したものである。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた幼児と保育者の皆様および関係者に対し、深く謝意を表します。

執筆者の所属と連絡先

鈴鹿大学短期大学部こども学専攻

Email : y-nanya@suzuka.ac.jp

## **Awareness of infants' sound and their impact on childcare -Through creative sound-play using newspapers in the 3-year-old class-**

**Yuko NANYA Rie NAGATSU**

### **Summary**

The purpose of this study is to find out what kind of sound awareness was raised in children of the 3-year-old class in their daily life and play scenes by experiencing a creative sound-play program using newspapers. In addition, it is to clarify how it was connected to the development of childcare and to verify whether it has become useful for the creative sound-play. After the start of the sound-play program, characteristic cases and reflections of children were extracted and considered from the records of study groups of the nursery teachers in charge. As a result, the awareness of sound in the 3-year-old class gradually obtained higher-level awareness in daily life as well as play scenes; transforming from “interest in sound” to “search for sound” and even to “the selection of musical instruments” of their own interest. In addition, awareness of "strength" and "timbre", which are the elements that shape music, was also recognized. It is possible that the children's awareness was promoted by being involved in a multifaceted and careful manner while facing newspapers. Children became interested in sound in the daily childcare and became involved more with the sound, which led to influence the environment composition of the nursery teacher. It was speculated that the sound-play program could provide the nursery teacher with a perspective of “sound.” It was considered that the sound-play program using newspapers had a positive value in that it promoted awareness of children and that it had an effect on childcare.

**Key word** : sound, 3-year-old class, creative sound-play, newspaper, childcare